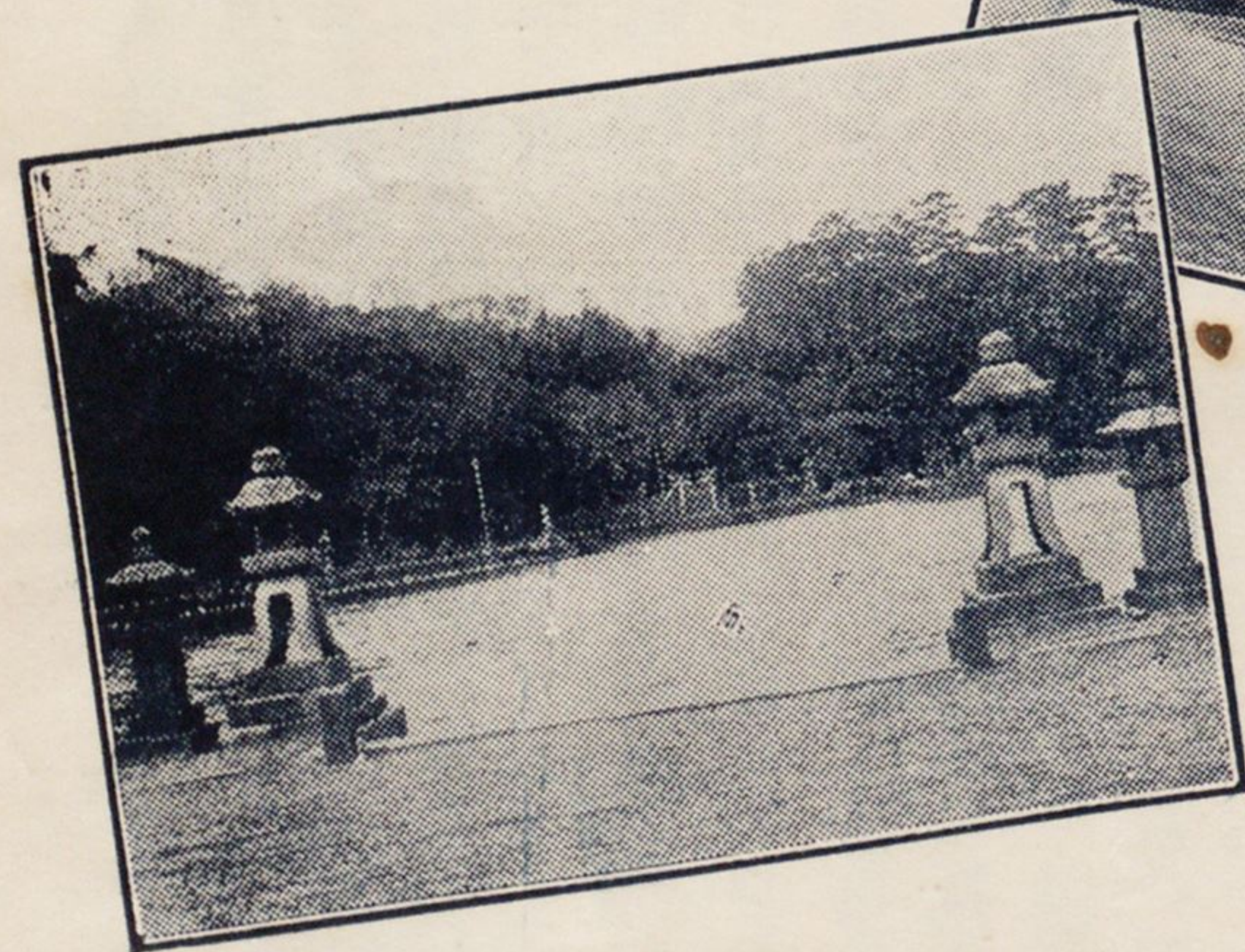
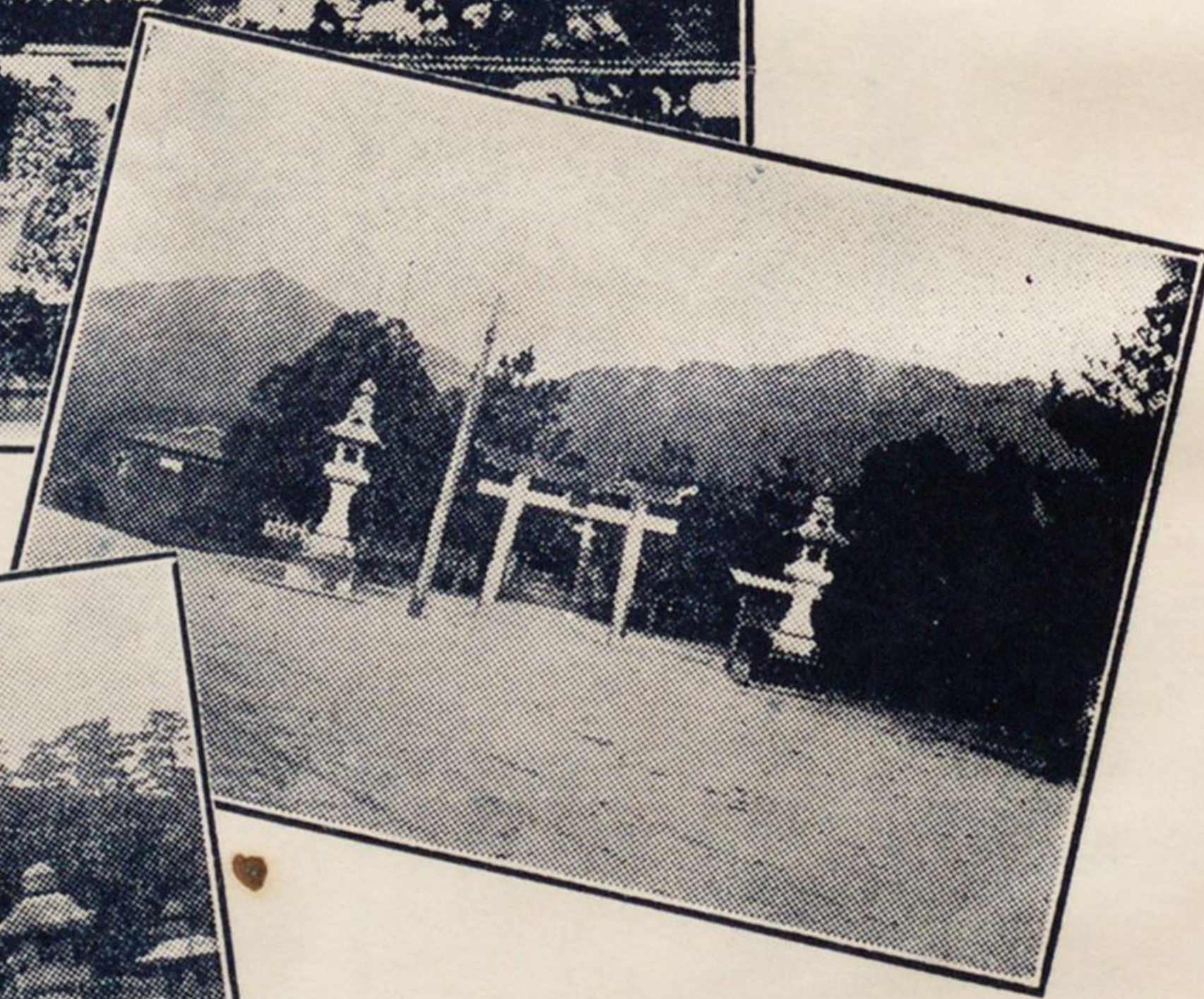
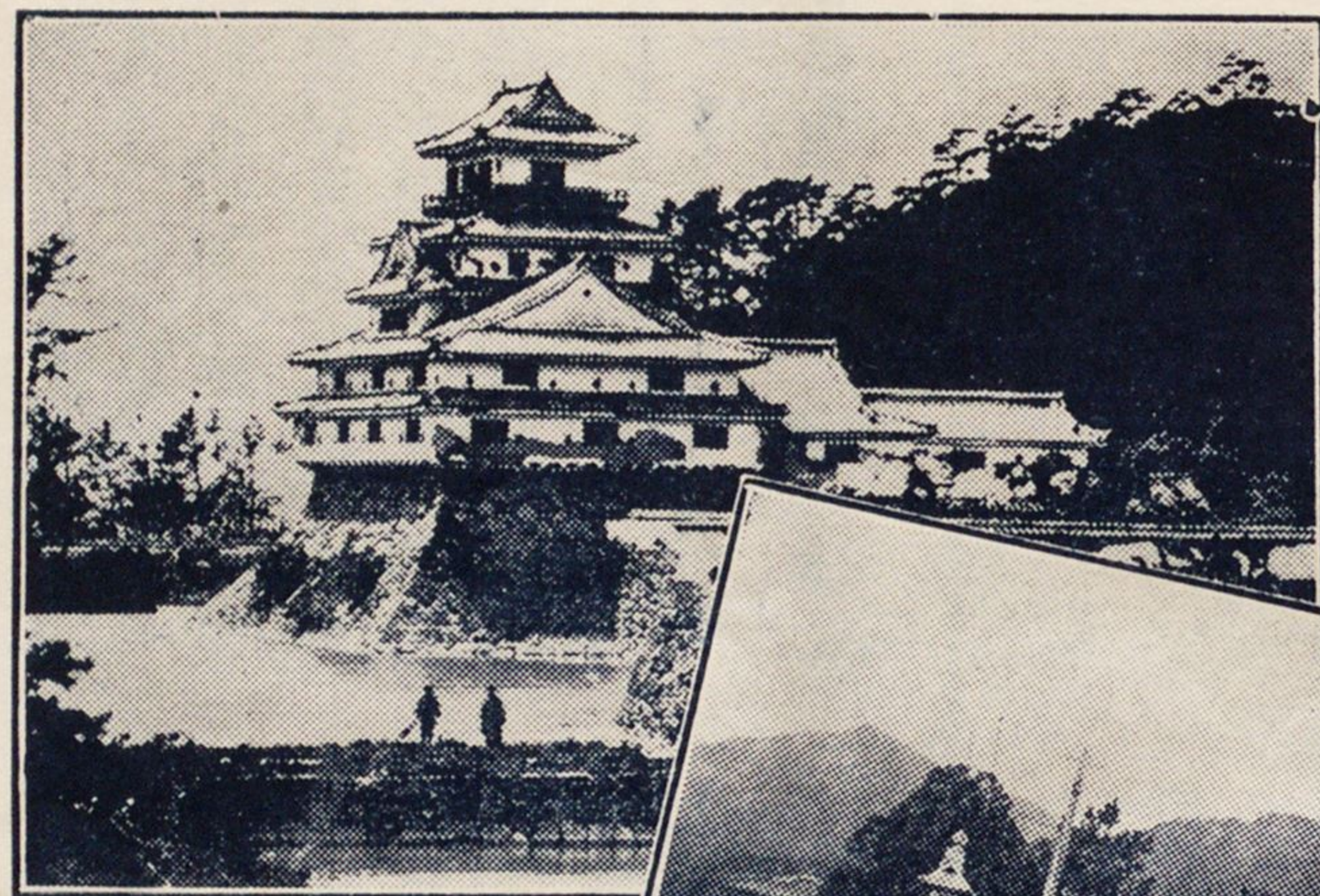


報月萩

錄附號五第



號月八年三和昭

行發町萩縣口山

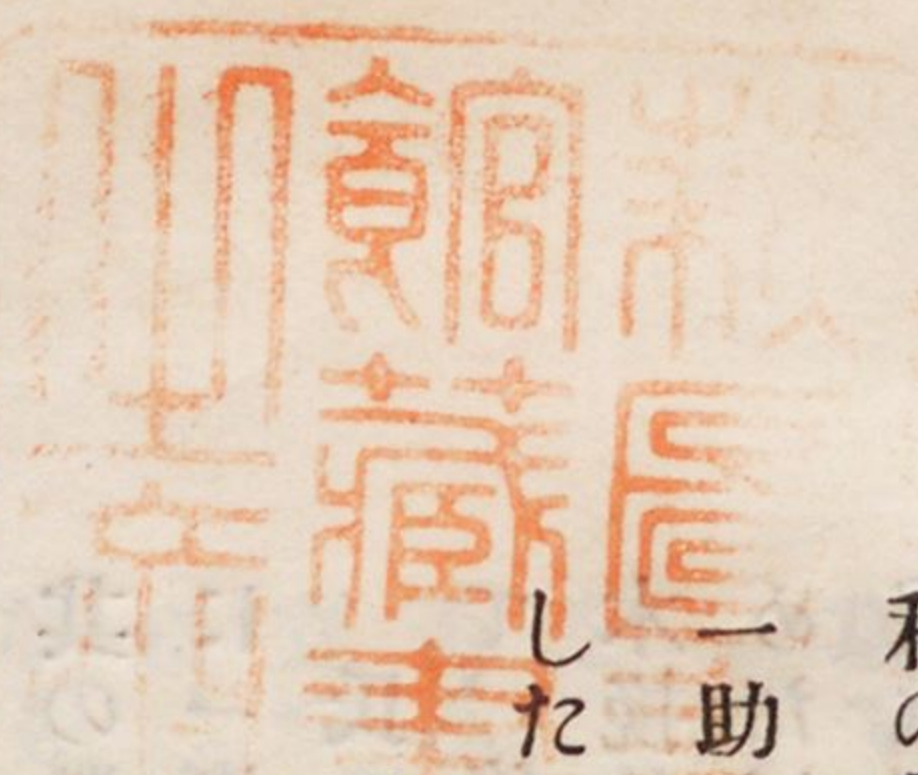
秋風集

はしがき

私の知人から印刷費をも提供して阿武郡須佐町出身の橋本新三君の事蹟を廣く社會に紹介し思想善導の一助たらしめたいと謂はるゝので即坐に其の美舉に共鳴を致し秋月報の附録として之を頒布することゝしたのである

昭和三年八月

萩町長 林 勇 輔



奇特なる寄附者

今回御大典奉祝の記念事業として、己が一身を生命保険に附し、畢生の努力を捧げて、萩町鎮座松陰神社と出身地の母校須佐町立育英小學校へ、各金五千圓宛を寄附することになつた橋本新三氏の経歴に就き、彼の舊師竹内新三郎氏は左の如く語つた。

橋本新三氏は須佐町の出身にて、本年四十七歳廿年來神戸に在り、今は横濱生命保險會社大阪支

店外務社員として、努力の生活を送つて居るが、その経歴中には、涙ぐまじきこと、感動す可きことが少くない。殊に、今回の寄附の眞意に就ては大いに視る可きものありて、氏は實に今の世稀に見る徳行の人と思ひ、今氏の直話と私の見もし聞もした所とに就き、その一斑を紹介することにした。

氏の母は産後の悩みにて早く世を去り父は木挽を業として居たが、別に志す所ありて、氏が三歳の時、氏をその祖母と叔父とに托して家を出で、遠く東京に旅立つた。残された氏は、主として祖

母の慈愛の下に育てられ、殊に氏は生れつき虚弱にして、祖母の心遣ひ一方ならず、或は人知れず滋養物を與へ、或は神佛に祈りなごして、只管その生立ちにつき丹誠を凝らした。氏は深く此の恩義を心に刻み、今尚ほ何處へ行くにも祖母の寫眞を肌身に付け、毎朝禮拜して追慕の誠を捧げてゐる、と私に語つた。氏は小學校での成績は何時も良好であつて、賞與を受けたことも度々あつた。其の性質至つて温厚、人に接して柔和であつたから、朋友間の折合ひも良く、又多くの人々からも愛せられて居た。退學後は、大工の師匠に就き、其の業を勵んだが、徴兵検査を受くる頃には、既に一廉の大工となつて居た。

氏の父は、東京にて後妻を迎へ、其の後故ありて、後妻の郷里なる博多に歸り、父は某材木商の木挽長として働き、後妻は古着商より呉服商を始めたが、その収入は父のそれよりも多かつたので父は何時も氣兼ねしてゐた。兎に角一時は暮し向きも豊かになりて、貸家の四五軒も持つ身となつたから、父は始めて氏を呼びよせることにした。

義妹を娶合せ、何呉れと世話して、氏の大工としての働きを助けた。其の時氏は廿二歳、妻は十八歳であつた。

其の後、父は繼母との相談纏り、再び氏等夫妻を、その膝下に呼びよせた。氏は父の言ひ付けを否み兼ね、家を舉げて兩親の許に赴いたが、日の立つに連れ、又もや、繼母の感情面白からず、殊に、嫁としての氏の妻に對する態度は、一入慘めなものがあつた。其の間に立ちて、父と氏とは氣の毒な思ひに耐へ難く、別居して繼母の感情を和らげたいと、程隔た所へ別れて見たが、やはりその感情は變りはなかつた。其の内、妻の身内の人々より、いつそのこと、神戸に歸るよう勧められ氏も亦、斯くする外今の一家の圓滿を期する途なしと考へ、再び兩親に請ひて、神戸に歸ることになつた。氏は神戸に歸りてよりも、何どかして繼母の心を和らげ、永く一家の平和を保たせたいものと、須磨寺に在る弘法大師に祈願を籠め、忙はしき家業の中ながら、毎月廿一日を期して、大師參りを續けた。氏が其の後、貧しき家の雨漏り

氏は恰も徴兵検査を終つた時であつたが慈愛深き祖母の手を離れて、十八年來親つてゐた父の許に行くのであるから、その悲みと喜びとが交々至つて、氏は何とも云ひ知れぬ感に打たれた。「私の其の時の心中、先生どうかお察し下さい。」と私に語つた。父の後妻なる氏の繼母は、その始め、他家に嫁ぎ一人の男子を舉げたが、夫死して其の家を出で、氏の父に組縁したもので、其の頃實子は壹岐にありて、病院を組織して居たが、氏の今の身分に較べては、目立つ程の懸隔があつた、それかあらぬか、繼母はさげすみの眼を以て氏を見ること多く、父はそれが爲め、何時も心を痛めて居た。氏は何とかして繼母の心を和げ、父の心を休めんとしたが、仲々にその効はなかつた。偶々其の時、鐘紡社宅の建築請負の爲め神戸より來て居た某氏は此の様子を見て、氏の境遇に同情し、神戸に行きて働いてはと、切に氏に勧めた。氏も斯くする方却つて一家の爲めであらうと考へ、兩親に請ひて神戸に行くことになつた。氏を神戸に連れ歸つた某氏は、深く氏の人と爲りを信じ、己が

其の他の破損を見て、無料修繕を思ひ立ち、千戸に迄及ぼさんとしたのも、その慈善の行により、且つは大師の御加護に依りて、成るべく早く、我家の圓滿なれかしと祈つたのに外ならぬのである。

氏は卅四歳の時、つくづく感ずる處ありて、職業の傍ら、夜間を利用して、神戸市立補習學校に入り、十五六歳の學友と伍して、専心學業を勵み遂に四ヶ年の補習教育を終つた、其の時、神戸商業會議所より、氏の成績と皆勤とに對し、特別精勵者として表彰された。氏が此の補習學校に通つてゐた時、突然、兵庫警察署より「出頭せよ」との呼出しに接し、急ぎ到りて見れば、一時發展して居た兩親は、今や大いに失敗して、福岡の片田舎なる七隈ヶ原にて、知る邊の者に頼り、その日の暮しも立ち兼ねて、父より福岡警察署へ保護願を出して居ること、氏は大いに驚きて、取るものも取り敢えず、直に兩親の所に駆け付けた。氏が始め思つたよりは見すばらしい兩親の有様、氏は涙ながらに、何呉れと勞はり、近所の質屋にて

質流れながらも小さつぱりした衣類を求めて、両親に着せ、神戸に連れ歸ることにした。其の時、父は七十六歳、繼母は七十二歳、いづれも歳多く老ひて、殊に父は足の運びも不自由であつた。博多驛より乗車して、三等室に入らんとしたが、折柄、乗客混み合ひ、足弱の父は便所通ひも自由ならずと考へ、氏は直に二等切符を買ひ替へて、両親を伴ひ二等室に入つた。見すばらしい三人の様子を見てゐた同室の乗客は、誰も皆、異様な眼を見張つてゐたが、果せる哉、巡廻して來た車掌は氏等三人に向ひて「お前等は此の室に這入つてはならぬ。三等室は此の次にあるから、早くその方へ行くがよい」と叱つた。氏は止むなく、二等切符を出して之を車掌に示し、両親を勞はる爲め、二等切符に買ひ替へた旨を話すと、車掌は、忽ち態度一變、その粗忽をあやまつた「それより二等室の乗客は、あらそつて、両親を勞つて呉れましたので、私は大變仕合せました」と氏は語つた。神戸に連れ歸つた時、補習學校の漢文科擔任藤澤道夫氏は、此の話を聞いて大いに感動し、左の詩

を作つて氏に與へた。

千里家山省兩親。相逢無語淚沾布。
誰知一介布衣客。分外投資伴老人。

氏が兩親を神戸に連れ歸つてからは、左迄豊かならぬ暮しながら、両親に對しては出來得る限りの慰安を捧げた、或る時、氏自ら人力車を借りて來て老いたる父を之に載せ、氏はその車を挽き、神戸見物をさせた。車の行かぬ所は父の手を引き或は父を脊負ひて、専心父の心を慰めることに努めた。その事誰言ふとなく、孝行大工とて、一時世上に宣傳された。時に大正七年、神戸新聞は創立廿年記念事業として、善行者十二名を表彰したが、氏は孝行大工の標目の下に、その一人となつた。

其の翌年、父は七十七歳、卒中症にて逝き、繼母は其の後四年を経てこれも七十七歳にて身まつた。繼母の病の床に臥した時、氏夫妻は、その始め繼母より受けたる慘めな扱ひは少しも思はず、専心看護に盡した。病ひ進みて身体の自由を欠くこと二ヶ月、中にも二便の世話は氏自ら之に

當り、永く父に付添ひて、父の世話して呉れた繼母のこと故、如何なるうるさい事にも厭ふべきにあらずと、氏はまめ／＼しく看護をした「母の病が愈々重くなりました時、母は、お前達に、濟まぬことをした、濟まぬことをしたと云ひ續けました。又其の時、母の實子は東京で醫者をして居りましたが、母の病氣の事、死んだ事を知らして遣りましたけれど、自分も來らず、手紙さへも送りませんでしたから、母は大層淋しい思ひを致しましたでせう。この二つの事を私が最も氣の毒に思つて居ります」と氏はしみ／＼と語つた。

神戸新聞は、其の後毎年記念日毎に、善行者十二名宛を表彰したが、氏は思ふに、此の表彰者中一人にても、先き／＼、表彰に背く如き行ありては相濟まぬと、同志と謀つて、神戸興風會を組織し相互に其の修養に努めることにした。

大正十二年、表彰者七十二名に達した時、同志相饒金して三百餘圓を蒐め、無料貸雨傘事業を始めた。神戸は新開地であつて、他より入り込む人多く、別に親戚知人も無き人にして、俄雨に逢ひ

たる時の困却を慮つたのが此の事業の趣旨であつた。其の雨傘には、公德其の他の訓言が、筆太に書き表はしてあつたから、之を借りたる人は、その親切を感ずると共に、その訓言に感化された者も少くなかつた様子である。

表彰者の中には、其の善行特に、世人の模範とす可き者も多つたから、氏は私財を投して、其の事蹟を印刷に附し、大方の有志に配布して、思想の善導に資し、或は教育の資料にも供した。

氏は財界不況の影響を受け、大工の請負事業の不利なることを察知し、翻然立つて、生命保険事業に身を投ずることになつた。それよりは、氏は保険募集の爲め各地を廻りて、勧誘を試むる傍ら同志を尋ねて、相互益々修養を積むことに力を注いだ。氏は同志に對し、暑中寒中には見舞状を送つて、その安否を尋ね、又其の修養を促すことを怠らなかつた。暑中見舞状の中に左の一節があつた。

明治天皇御製

暑しとも言はれさりけり煮わかへる

水田の中の賤を思へば

血氣盛んな青年が、家の中に居りながら、暑い／＼と怠ける者もあれば、日中炎天の下に、重い屋台を挽きながら、もつと暑くならねば商賣がない、と云つて歩く水屋のお爺さんもある。ものは思ひようにて、どんなにもなるから、お互に暑さに耐えて、努力しませう。氏は斯く万事に就き、細心の注意を拂つて、修養に努力して居るが、今回行はせらるゝ御大典に對し、氏が奉祝の誠意を捧げて發意したのが、此寄附の事業である。其の熱誠の籠むる所は、私に送つた左の手紙にて了解することが出来る。

(前略)陳者、今般御大典記念事業として、松陰神社及育英小學校へ、各五千圓宛寄附致度、其の方法として、私自身を生命保険に附し、該金受取扱人を、萩、須佐兩町長として、去五月十二日第一回保険料納金致置候。

右者、私儀多年の宿志にして、唯時期尙早の點有之候へども、今度御舉行の祝典は、私共年輩の又となき最も嚴かなる御慶事に候へば、此際

思立ち候事最も有意義と存候。私事齡既に五十に近つき候も、先生を憧がれ候事、父や祖父に對する情に等しく、何時迄も幼なき時代の御教訓今尚ほ念頭を去り不申候、事茲に立到り候も全く三つ子の心百歳とやら、先生の御講義中、私の最も快感且つ印象深き一節、今申上候へば定めし「さうであつたかな」と御思念被遊候事と存候。時に皇室と毛利家の特殊の關係、其の源を關ヶ原の役に發し、藩祖西軍に與したる故を以て、祿高の削減、一層尊王愛國の精神を旺盛ならしめ、延て、維新の大業を完成したる因果關係、是に附隨して起り候尊王志士の情操或は防長人士の責任論等、御訓示の追想も無限に御座候。兎も角、此の義、此の思想を、層一層鼓吹し、代々郷土より輔弼の人材を中絶させざる様との念願に外ならず候。茲に因縁最も淺からざる松下村塾及育英館保存の爲かく指定仕候、就ては、該保險証券は受取人の所持可致者に付御手数數誠に恐入候へ共、須佐町長來萩の時期御問合被下、先生より兩町長へ御手渡被下候

へば幸甚の至りに存候(後略)

斯くして氏は、萩、須佐兩町長に對する、保險証書と、第一回料金拂込領收書とを私に送り、兩町長に傳達方を依頼した。其の後氏は自ら來りて、私を訪ひ、更に詳しく、此の寄附に就ての眞意のある處を明かにした。私はその時万一を慮り、私と氏との間柄として、赤裸々に尋ねた「世上往々賣名の爲め奇特を装ふ者もあれば、妻子の衣食を顧みず己が思付を果さんとする者もある。此の點大いに注意すべきものだ」と云へば、氏は嚴として答へた「先生、其の點はどうか御安心下さい。私の此の寄附に就いての眞意は、先日差上げた手紙にて御諒解のことゝ存じます。又私には、私夫妻と五人の子があります。此の七人の家族は、私の月収と、長男次男の収入とにて、私風情の生計は、充分立てることが出来ます。私には、別に、保險募集の成績に依り、會社より受くる賞金があります。私は此の賞金を以て、此の寄附の料金を充つる積り、今後は一層皆様の厚き御同情に依り更に懸命に努力して、希くは廿年間の料金を一時

に纏めて、兩町長にお渡ししたいものと思ひます。そしてこの懸命の努力が、又やがて私の會社に對する眞に忠なる所以であると、私は固く信じて居ります」と。こゝに到りて、私は、氏の純潔なる意氣に感ずると共に、又大いに安心した。其の後氏は、萩、須佐兩町長を訪ひ、松陰神社に參拜し育英小學を訪れ、茲に全く此の寄附の手續を了つた。嗚呼、實に氏は徳行の人、勤勉の人として、推賞すべきものがあると思ふ。又、此の寄附の動機が、其の昔私の與へた教訓に、胚胎したものとすれば、たとへ私目盲ひて、老ひの身の如何に不由なりとは云へ、必ずや、奮起して、教へ子の此の事業を援け、其の趣旨を貫徹せねばならぬと決意し、妻を付添ひに、萩町役場を訪ひ、明倫小學校に到り、又松陰神社に參拜して心竊に奉告の誠を捧げ、教へ子の幸多かれと祈つた。氏の來り訪ふに方り、三人連れ立つて須佐町に到り、氏は叔父の家に入り、私共二人は役場を訪ひ、小學校を尋ねた。

育英小學校は氏の母校にして、又私の因縁淺からざる所、殊に今回の寄附は、此の學校に對して氏が大いに誠意を捧げんとする處であるから、私は氏の事蹟に付き特に詳話して、氏の如き郷土愛に燃ゆる第二の橋本、第三の橋本等、幾多の橋本が輩出し、又氏の期待に報いて、國家有用の人材が、より多く輩出せんことを切望した。

教育は百年の大計と曰ふ。私は、氏の此の奇特なる行爲に就いても、斯の言の真味あることをしみじみと感じた。(畢り) (七月二十五日記)

育英小學校は氏の母校にして、又私の因縁淺からざる所、殊に今回の寄附は、此の學校に對して氏が大いに誠意を捧げんとする處であるから、私は氏の事蹟に付き特に詳話して、氏の如き郷土愛に燃ゆる第二の橋本、第三の橋本等、幾多の橋本が輩出し、又氏の期待に報いて、國家有用の人材が、より多く輩出せんことを切望した。

育英小學校は氏の母校にして、又私の因縁淺からざる所、殊に今回の寄附は、此の學校に對して氏が大いに誠意を捧げんとする處であるから、私は氏の事蹟に付き特に詳話して、氏の如き郷土愛に燃ゆる第二の橋本、第三の橋本等、幾多の橋本が輩出し、又氏の期待に報いて、國家有用の人材が、より多く輩出せんことを切望した。

昭和三年八月十三日印刷
昭和三年八月十五日發行

編輯兼發行者 萩町長 林 勇 輔

山口縣阿武郡萩町大字西田町五十五番地

印刷者 荒瀬 徳 治

山口縣阿武郡萩町大字西田町五十五番地

印刷所 信清舎印刷所

Vertical text block, likely a library stamp or administrative record, containing several lines of faint characters.

Small handwritten mark or characters at the top left.

Small handwritten mark or characters in the upper middle section.

Small handwritten mark or characters in the lower middle section.

Small handwritten mark or characters at the bottom left.